

## 巻頭言

# 病院図書室について思うこと

日本赤十字社和歌山医療センター院長  
小西 裕

かつての論文検索では、邦文なら「医学中央雑誌」、欧文なら「Index Medicus」の分厚く、細かい文字の頁を繰った思いだが、まず浮かぶ。それに比して現在はどうかであろう。自室のコンピュータで、必要な事項の論文の目録のみならず、抄録までもが簡単に手に入れることが出来る。この IT 時代を迎えて、図書館も目に見えて様変わりしてきている。「医学中央雑誌」、「Index Medicus」は消えた。書名カードも著者名カードも消えた。かつて、“図書館は大学あるいは病院のレベルをうつす鏡”と言われて、蔵書の数の多さが取りざたされてきた。確かに、実物の論文をすぐ見られるメリットは大きいが増え続ける蔵書を、収容するスペースは限られている。各施設が別々に蔵書を所有すること自体が無駄で贅沢なことと思われるようになってきた。しかし、いつの時代でも変わらぬ図書室の最大の役目は、医学情報の入手の場であることである。EBM 時代を迎えて、膨大な医学情報の収集は、確実且つ迅速でなければならない。これからの図書室に求められるものは何だろう。

### 1. 蔵書の数を誇る時代は終わった

IT 化時代を迎えて、各施設が競って蔵書を保有する必要はない。とくに、各診療科ごとの膨大な数の月刊英文誌は不要である。日進月歩の医学の動向を追うに最も必要なものであるが、今や「Medline」等で、インターネットを利用すれば、実物の雑誌が手元に届く前に検索でき

るし、抄録だけなら立ち所に手に入れることが出来る。しかし、実物、全文を手に入れる手段が残されなければならない。これについては、日赤の“スケールメリット”が生かされた各施設図書室との連携が求められる。しかし、一方で視聴覚的情報、たとえば CD、ビデオ、DVD 等の収集はもっと積極的であってもよいかと思われる。そう遠くない将来、オンライン出版、オンライン図書室が連動すれば、もはや図書室には蔵書というものは不必要となるかも知れない。

### 2. 患者さん等への一般公開が求められている

今の“患者中心”医療で最も求められているのは、“インフォームド・コンセント”や“セカンドオピニオン”に代表される、患者さんに対する情報提供である。患者さんが自身の病状を理解し、自己決定を下すための協力者として、病院図書室は新たな役割を背負っている。医学情報収集を手助けする図書館司書の役割も重要になってくる。これも、新しい“患者サービス”として位置づけられるであろう。

### 3. 図書室のコンビニ化が求められている

病院機能評価のチェック項目の中に、「24 時間閲覧体制」を問う項目が入っている。患者さんは何時でも好きなときに利用出来るコンビニのような機能を病院に求めつつある。夜間の診療の場に、救急でもないのに、自分の都合だけで診察にやってくる患者さんも珍しくなくなった。しかし、夜間の図書室は、日中忙しくて

時間のない医療従事者が、やっと文献検索に費やせる自由な時間を得て、赴く場所でもある。

#### 4. 図書室は職員にとっての癒しの場である

stressful な職場で、ほっと息抜きする場は、タバコやコーヒーだけではない。静かでゆったりとしたクッションの効いたソファに身を沈めるのも最高である。職種を越えての職員の交流の場としても求められている。何時でも、何

時間でもゆっくり出来る場所は不可欠である。

和歌山医療センターでは、今病棟の改築を控えて、図書室についても見直しの機会がきている。現在の図書室があまりにも狭隘であるので、とにかく、まず広々としたものが欲しいというのが本音であるが、将来の電子図書館を念頭においた対応は不可欠であろう。